塩田光喜編『オセアニアの知と権力』　調査研究報告書　アジア経済研究所　2008 年

第 6 章

地図の力
―レナード・メイソンの『ローラ・レポート』を読む―

棚橋 訓

要旨：　本論は、1967 年にハワイ大学教授レナード・メイソンがミクロネシアのマーシャル諸島マジュロ環礁ローラ島で作成した地図に着目し、その作成過程と再生産過程の分析を通じて、近代における地図（＝部分化された知識形態）と権力の関係に関する予察を行うことを目的とする。結果、「そこの眼」による表象と「そとの眼」による表象の間にある相互補完と拮抗の関係の考察から、「そこの眼」による表象と「そとの眼」による表象の節合と亀裂が生み出した「複視」の一形態として地図を理解する重要性を指摘した。また、メイソンの地図がそれ以前の地図との共鳴＝再生産関係のうえに成立し、それ以降の地図にとっては新たな共鳴＝再生産関係の連鎖の起点となったことを指摘した。そして、新たな共鳴＝再生産関係においては、原図の単純な反復再生産ではなく、原図を意図的に部分化・ロゴ化して、多くの「化身」を生産することが逆に原図の正当性を高め、「空間的現実」を予見的に規定してしまう地図の力を生み出していることを見い出した。

キーワード：　マーシャル諸島、メイソン、複視、部分化、ロゴとしての地図

はじめに　―地図・知識・権力―

本論は、ミクロネシアのマーシャル諸島（the Marshall Islands）に属する１つの環礁州島の地図が作成された過程とその地図が再生産される過程とに着目しながら、地図という知識形態と権力の関係について考えていくための予察を行うことを目的としている[1]。

知識と権力の問題を考えるために、なぜ地図なのか。この世界の「現実」を捉え、それに基づいてわれわれ自身の居場所を定位しようとするとき、地図（という概念）は必要不可欠な道具／装置としてわれわれと共にあると言ってよいであろう。ところが、地図は「世界」のあるがままの反映であるとは言いがたい。むしろ、地図は常に「世界」の部分的表象としてあると理解するのが妥当であろう。地図は、誰が、いつ、どこで、何のために描くのかというそれぞれの要素に応じて、偏りをもってかたちづくられる。地図は、その作成時の政治的権力が突きつける目的／動機にも呼応して、偏った「世界」を描きあげる。それゆえ、地図作成時の部分化の特質を読みとることができれば、その作成者が地図化の標的とした「場所」に対して抱いた興味関心の在りかたを探ることができると考えられる（cf. Gregory[1994]）。

しかし、政治的権力によって一方的に形成される偏向した知識の在り方として地図の存在を一義的に捉えて、偏向に対する批判的検討を試みるだけでは十分とは言えないであろう。なぜなら、ジョリー（Margaret Jolly）が指摘するように、地図の機械的再生産が安定化する近代以降のオセアニア地域を例にとって見ると、地図の成立過程には「そこの眼」（indigenous or islander’s vision）による表象と「そとの眼」（foreign or outlander’s vision）による表象の相互補完的関係と拮抗関係が重要な要素として介在している（Jolly[2007: 508-509]）。この２つのタイプの眼による表象がうまく節合される場合もあれば、亀裂を抱えたままに布置される場合もあろう。そして、２つのタイプの眼による表象の節合と亀裂が生み出すものとしての地図は、その根底に「複視」（double vision）の状況を抱え込んでいるとも言えよう（cf. Thomas and

Losche [1999])。マーシャル諸島の一環礁州島の地図作成とその再生産過程に思考をめぐらせる際にも、この２つのタイプの眼／表象の布置と「複視」の考え方に留意することが肝要となろう。

第 1 節　アンダーソンの地図論

マーシャル諸島の一環礁州島の地図作成とその再生産過程を具体的に取り上げるまえに、アンダーソン（Benedict Anderson）の地図論に依拠しながら、地図と知識そして権力の関係について議論を深めておきたい。

アンダーソンは、19 世紀中葉からの植民地のイデオロギーと政策を定式化した「文法」に目をやれば、その「文法」をより鮮明に可視化した 3 つの「権力の装置」、すなわち、センサス、地図、博物館にいきあたるという（Anderson[1991: 163-164])。アンダーソンによれば、3 つの権力の装置は、いずれも 19 世紀中葉以前にその起源を有するが、植民地化の過程が出版資本主義とも連動しながら機械的再生産の時代に突入するのに応じて、その形態と機能を変化させてきた。そして、センサス・地図・博物館は、統治する人間の性質・領土の地勢・植民地領土の来歴の正当性をそれぞれに「想像」しながら、同時にその連鎖が植民地の領土支配をトータルに「想像」する道筋を拓いたという。

トンチャイ・ウィニチャクル（Thongchai Winichakul）による 19 世紀シャム王国の地図作成の歴史を参照しながら（Thongchai[1988])、アンダーソンは機械的再生産の時代に先立つ祖型的な地図とヨーロッパ起源の近代の地図とを対比させる（Anderson[1991: 171ff.])。前近代のシャムには天上界・地上界・地下界を垂直的な軸で繋ぐ「宇宙図」（cosmograph）と、軍事戦略と海運のために景観を水平的にイメージ化したダイアグラムの２種の地図が存在した。

これらは、地域的／局地的な地図であり、一定の作図法に依拠しながら広範な地理学的文脈に位置づけられることはなく、近代の地図の特徴である鳥瞰図の規則とも無縁だった。また、鳥瞰図の規則とともに近代の地図を特徴

づける境界線とも無縁だった。

地図上の境界線は、政治的主権の限界を決定・明示し、政治的勢力を具体的な空間的形態として定義する。政治的勢力が段階的で入子状の階層性を有していれば、境界線にもその階層関係が凝縮されてくる。それゆえ、地図の境界線は、階層的な政治的勢力が地表面と織り成す垂直的なインターフェイスを表現するものと捉えられる。そして、近代の地図が「空から」鳥瞰的に地表面を捉えるという特性を有することから、境界線は一層「垂直的な特性」を帯びることになり、「水平的な広がり」は失せる。

一方、機械的再生産の時代以前のシャムには境界を示す置石などの標識があった。しかし、境界石は峠道・隘路・浅瀬などの戦略上の要衝に、敵陣の境界石との間に緩衝地帯を設けながら、断続的に配置されていた。従って、境界石は、垂直的インターフェイスというよりも、人間の目線から、王の政治権力の拡張点を水平的に有徴化するものであった（Anderson[1991: 172]）。

鳥瞰図と垂直的な境界線によって「空間的現実」を捉える近代の地図概念は、新たな政治言語の誕生も促した（Anderson[1991: 173]）。1761 年、ハリソン（John Harrison）によるクロノメーターの発明は経度の正確な計測を可能にし、「前人未到」の地点すらも地球の表面を覆う幾何学的な格子目の中に位置づけた。そして、現代に至るまで、格子目の内実を埋める作業が探検家・測量技師・軍人たちによって進められた。アンダーソンは、地球全体を覆う緯度経度の格子目に代表されるように、ヨーロッパ・スタイルの地図が「全体化を促す分類」（totalizing classification）を礎にして、官僚主義的な地図の作成者を生み出し、そうして生み出された地図情報を消費する者に大きな転換をもたらしたことを強調する。

アンダーソンは再びトンチャイの研究成果に目を向けながら、次の要点を確認する。「全体化を促す分類」に基づいて「前人未到」の場所すらも格子目の中に納めてしまう近代以降の地図化の作業は、「地図は現実の科学的な抽象化である」という常識を真っ向から否定するものである。地図は既に「そこ」にあるものを客観的に描写するのではなく、逆に「そこ」に「空間的現実」

をつくりあげる。地図はそれが描こうとする「空間的現実」「の」モデルではなく、「空間的現実」「のための」モデルである（Anderson[1991: 173]）。換言すれば、近代の地図は、地球の表面に対して投影される人間の意識を形象化するという性格を一層強めたということであろう。ここで、地図とセンサスの相互作用の重要性も浮上する（Anderson[1991: 174]）。例えば、地図によって描かれた「空間的現実」はセンサスの基盤をなしている。連続的な集団の広がりや人間特性は、先ず、彼らが生活するテリトリーを特定する境界線の画定作業（＝分断）によって「空間的現実」に変換され、次いで、分断されたテリトリーの内実を埋める作業としてセンサスが実施されていく。

そして、アンダーソンの地図論において注目したいのが、「全体化を促す分類」に基づく「空間的現実」「のための」モデルとして作成された近代の地図が当初の目的からズラされて、２つの「化身」―すなわち、「歴史地図」（地図の編年的配列）と「ロゴとしての地図」（map-as-logo）―を出現させるメカニズムの指摘である（Anderson[1991: 174-175]）。ここでは特に、「ロゴとしての地図」の議論に注目したい。「ロゴとしての地図」とは、「空間的現実」「のための」モデルとして作成された鳥瞰的な地図が、境界線の形状、緯度経度、地名、河川・海岸線・山岳部などの特定の地理的特徴のみを残して記号化されたものをさす。鳥瞰的に構築された地域の「空間的的現実」から改めて「現実」が削ぎ落とされ、再表象化＝再提示される。ロゴとして再表象化された地図は、ポスター、紋章、印章、レターヘッド、等々、あらゆるものに登場する。そして、ロゴ化された地図は反植民地主義的な民族主義運動の反旗を飾るデザインにも採用されることが多い。「そとの眼」による表象が「そこの眼」によって読み替えられ、ひとたび近代の地図の境界線によって分断されていた人間集団に新たなまとまりの契機をもたらす政治的象徴に転化されるという逆説がそこにある。

第 2 節　『ローラ・レポート』の成り立ち

マーシャル諸島は環礁のみからなる 180 平方キロメートルの国土と 5 万 2000 人（2007 年度）の人口を擁する新興小島嶼国家である。そして、独立までに、その国土は幾重にも外来の植民地統治の対象となってきた。マーシャル諸島は 1885 年にドイツの保護領となった。第一次世界大戦が勃発した 1914 年、マーシャル諸島を含むミクロネシアは南洋群島として日本の占領下にはいり、1920 年には国際連盟から日本の南洋群島の委任統治が認められ、日本による実質的な植民地統治期を迎えた。1945 年の第二次世界大戦の終結時からアメリカ軍の占領が始まり、1947 年に国連の太平洋信託統治領としてアメリカによる統治期に入った。そして、1978 年、住民投票の結果、マーシャル諸島はミクロネシア連邦から脱退し、翌 1979 年に憲法を制定して自治政府を発足させた。1986 年 10 月にアメリカとの間での自由連合盟約（コンパクト）発効を経て、マーシャル諸島共和国として独立を果たした。

本論で扱う地図はマーシャル諸島が国連太平洋信託統治領としてアメリカ統治下にあった 1967 年に作成されたものである。同年 6 月から 8 月にかけて、マーシャル諸島マジュロ環礁ローラ島（Laura Islet of Majuro Atoll、旧名 Majuro Islet）においてハワイ大学人類学部主催の実習「人類学のフィールド調査技法と地域社会調査法」が実施された。この実習の引率者だったハワイ大学人類学部教授レナード・メイソン（Leonard Mason）[2]は実習中にローラ島の全島地図を作成し、その成果は A0 版の地図として実習報告書『ローラ・レポート』に付録として添付された（Mason, ed.[1967]；図 1 参照）。

ホノルルを 6 月 5 日に発った一行は 14 日にローラ島に到着し、8 月末まで調査を実施した。実習参加者は組織者・引率者のメイソンのほか、当時ハワイ大学人類学部大学院生であったルッツ（Henry Rutz）、ポロック（Nancy Pollock）、シーリー（Michael Seelye）、スチュワード（Michael Steward）の 4 名、マーシャル諸島人から選抜されたドミニク（Charles Domnick）、デブルム（Oscar de Brum）、ハイネ（Carl Heine）、ミルン（Carmen Milne）の 4 名で、

大学院生 1 名とマーシャル諸島からの選抜者 1 名がそれぞれにチームを組んで調査を実施した。実習開始後にハイネはサイパンで職を得たためにチームを離れ、彼に代わってカプア（Phillip Kabua）が調査に加わった（Mason, ed.[1967: iv-xxii]）。

『ローラ・レポート』本編の中核は上記 4 チームが調査した地域社会の組織、土地保有制度と伝統的権威、自然資源の利用、心理と行動特性についての記載に充てられているが、最終章はメイソンが地図作成の作業過程を詳細に記した「マジュロ島（ローラ島）の地図作成作業」であり（Mason, ed.[1967: (1)-(30)]）[3]、付録として「マジュロ島（ローラ島）地図」が添付されている（図１）。

第 3 節　メイソンの地図作成作業

以下に最終章「マジュロ島（ローラ島）の地図作成作業」からローラ島の地図作成作業の詳細を追っていくことにする。

メイソンは、今回の調査実習の基盤情報として島全体（entire community）の地図をつくることが必要であると認識して、4 チームがそれぞれに調査を実施するのと併行して地図作成作業に専従した。

地図に登載されるべき内容としては、世帯、文化施設（道路、住居、各種建造物、内陸の生活路）の分布情報、ローラ島 136 筆の土地区画（*wato*）の近似的配置と区画の固有名の情報を挙げ、地図に付帯する重要情報として 136 筆の土地区画に対して権利を行使する特定役職者（personnel: *iroij lablab*, *iroij erik*, *alab*, first *dri jerbal*）のリストも併せて作成している（Mason, ed.[1967: (10)-(30)]）。

ローラ島の 4 つの伝統的地区（Jeirok, Lobat, Eolab, Lomar）を対象域に設定し、先ずは、土着の方位観を調べ、その方位観が土地区画の分割方法と固有名の命名法の原則であることを確認する。具体的には、外洋側（*lik*）とラグーン側（*ar*)の概念で構成される東西の軸と、南（*rak*)と北（*ean*）の軸が土地

区画の分割方法と命名法の基盤として特定された。

さて地図作成の根幹となる具体的な測量方法であるが、アメリカ陸軍作成のローラ島の外郭図[4]と同島に駐在した平和部隊員が作成したセンサス・保健調査用の地図情報を原資料に、手持ち磁石（hand compass）と歩測によって登載情報の定位を行った。また、ローラ島を走る幅数メートルの主要道路が歩測の基準点となった。外洋側とラグーン側を南北に走る主要道路 2 本、島の中央側線沿いにおおむね東西に走る「死への道」（*ial-an-mij*）、島の南半部の内陸にある「ボブの道」（*ial-an-Bob*）を計測の基準軸として利用した。「死への道」は外洋側の船着場とラグーン側の集落中心地を結ぶ物資の搬出入用に日本植民地期に整備されたといわれる道路である。また、「ボブの道」は、第二次世界大戦前に日本軍が建設を試みた内陸道路と菜園地の跡を利用して、太平洋信託統治領マーシャル諸島行政区の公共事業担当官ボブ・ワード（Bob Ward）が 1961 年から 1962 年にかけて建設を試みたローラ道（Laura Road）の跡地である。ちなみに、「ボブの道」はメイソンの測量時に既に藪に覆われており、実際には道路の体裁をなしていなかった（Mason, ed.[1967: (3)]）。

地図作成作業における最大の難問だが、土地区画の慣習的な境界標識（boundary marker）の確認と境界位置については丹念な民族誌的な聞き取り調査によって実施した。聞き取り調査には、ローラ島在住のジャベメメジ（Jabememej）の協力を得た。ジャベメメジは 1967 年当時 32 歳の男性で、「知識が豊富で、非常に勤勉な性格であり、地図作成の技法を直ぐに習得して」、メイソンの質問内容事項も直ぐに察するような優れた「情報提供者」であり「共同調査者」であった（Mason, ed.[1967: (4)]）。地図作成にかかった作業時間は延べ 325 時間。うち 43 時間は測量作業に、残りはメイソンとジャベメメジによる聞き取りと記録に費やされたという。ジャベメメジが提供する情報が曖昧な場合には、ほか 5 名の「知識豊富な」情報提供者に対する確認を行った。

聞き取りによって得た土地区画の固有名の綴り方も難題であった。固有名の綴りは「ジャベメメジが好む綴り方」を基礎に、ハワイ大学の言語学者ベ

ンダー（Byron Bender）がマーシャル語地名研究で確定した音声学的記述方式に基づいて、これにメイソンが修正を施した。メイソンはジャベメメジを含む地元協力者の反論を受けながらも、マーシャル語正書法の標準化にもある程度寄与したことを自負している（Mason, ed.[1967: (6)]）。

136 筆の土地区画に対して権利を行使する特定役職者リスト（個人名）の作成では、1948 年のアメリカ海軍による概要調査（126 区画分）を基礎に、聞き取りで追加修正を施した。聞き取りではジャベメメジに加えて、リアプ（ローラ在住、1967 年現在 50 歳台半ばの女性。聞き取りはデブルムとルッツが実施）とエライザ（土地権と系譜の知識が豊かなことから 68 歳でマジュロ地区の地方判事に選出された男性）の 2 氏から見解を聴取した。『ローラ・レポート』に掲載されたリストにアメリカ海軍の調査結果と 3 氏からのすべての聞き取り情報を併記している（Mason, ed.[1967: (10)-(30)]）。

メイソンは以上のような作業を経てローラ島の地図と土地権者リスト付表が完成したが、土地区画の測量結果と土地権者リストの特定は極めてセンシティブなものであるため、いずれの情報も「地図に登載の土地区画の形状と大きさは十分に正確なものだが、推測も含まれるために法的証拠として用いることはできない。また、そのように利用されることを意図して作成されたものでもない」ことを敢えて明言している（Mason, ed.[1967: (6)]）。

第 4 節　重層する地図化の作業

メイソンの地図作成作業には、「そこの眼」と「そとの眼」がそれぞれに重層的な構造を持ちながら、重ねあわされている。ジャベメメジはほかの地元民に聞き取りを行ってそれを取りまとめる役割を負ったことで、「そこの眼」を統括しながら全体化する「そこの眼」の位置を得た。また、彼にすら全体化しきれない場合には、「そこの眼」は多元的に分散したままに布置された。ジャベメメジは地図作成の過程で「そこの眼」から主張を行ったが、メイソンはそのジャベメメジの見解を重視しながらも、「疑義」が生じた場合に

は，ほかの情報提供者の視点と交差させてジャベメメジの「そこの眼」をさらに上位で相対化した[5]。従って、重層化された「そこの眼」に基づいて、メイソン自身の「そとの眼」が確定されていったのだと表現されよう。

翻って、メイソンとジャベメメジによるローラ島の地図は、アメリカ陸軍作成のローラ島の外郭図と同島に駐在した平和部隊員が作成したセンサス・保健調査用の地図情報を参照しながら実施された調査に基づいている。ここで確認されるのは、メイソンの地図は「そとの眼」で作成されたほかの地図との共鳴＝再生産関係のうえに成立したということである。このことは、ジャベメメジら情報提供者の複数の「そこの眼」が、複数の「そとの眼」による複数の表象間で生起した共鳴＝再生産関係に巻き込まれてもいたことを示唆している。同様のことは土地権者リストの作成過程についても指摘される。

また、共鳴＝再生産関係のうえに形象化したメイソンの地図は、その出版公開後に、新たな共鳴＝再生産関係の連鎖を生み出していった。1981 年に刊行されたローラ島の植民地期遺構分布図は、メイソンの地図から土地区画線と主要道路だけを残して住居・各種建造物・内陸の生活路・「ボブの道」・土地区画固有名の記載を消去し、そのうえにドイツ保護領期以降の植民地期遺構の位置を番号で記載している（Rynkiewich[1981:Figure10]；図２参照）。

メイソンは自ら作成した地図に関して「推測も含まれるために法的証拠として用いることはできない」ことを明言したが、その但書とは裏腹に、マーシャル諸島共和国政府は同地図を実質的に公式の地図と同様に重用している事実も指摘される。2006 年 8 月の現地調査時に中央政府土地測量局（Land and Survey）を訪問して情報収集した際には、土地区画・その固有名・主要道路（「ボブの道」を除く）のみを残すかたちでメイソンの地図を「掃除」したものを、ローラ島の基本土地区画図（land tract map）に採用していることを知った（Land and Survey of the Republic of the Marshall Islands[n.d.]；図３参照）。さらに、中央政府土地登記局（Land Registration Authority）のコンピュータ上の土地登記データベースには、メイソンの地図の土地区画線のみをスキャンして作成したデジタル・マップが装備・搭載されていた。

具体的な来歴は定かでないが、パシフィック・マネージメント・サービス社（Pacific Management Services Corporation）が 1991 年 8 月 27 日に作成完了した地図「ローラ島の淡水分布図」に示されている土地区画およびその固有名も、メイソンの地図情報を再生産したものである（Pacific Management Services Corporation[1991]；図４参照）。

メイソンの地図から特定情報を削除したり（すなわち、原図から一部だけを抜き出して部分化したり）、ある場合には情報削除したうえで別情報を付加したりという作業が繰り返し行われて、メイソンの地図の「化身」が多く生み出されてきたという事実をここでは確認したい。また、土地区画線と道路だけを残して再生産されたメイソンの地図は、アンダーソンが指摘した地図のロゴ化の問題系に直結する事象として理解できると考えられる。

おわりに

ハラウェイ（Donna Haraway）は「状況におかれた知」（situated knowledge）という表現を提唱して、すべての知識は状況化され、部分的なものであることを指摘した（Haraway [1991]）。この「状況におかれた知」の存在を前提とすれば、覇権的な権力と知識の一元的でトータルな結びつきは想定し難い。また、同様に、一方的な植民地的「まなざし」に権力の在り方をすべて仮託してしまうことも慎むべきであろう。

ジャベメメジの「そこの眼」による表象とメイソンの「そとの眼」による表象の亀裂と節合が生み出した「複視」の一表現型としてローラ島の地図を微視的に分析し、その地図が部分的に再生産されロゴ化する過程を時系列的に検証していくことは、「状況におかれた知」の視点から地図と権力の関係を捉えなおす作業の始点をなすものだということを強調したい。

本論では十分な分析を展開する紙幅を確保できなかったが、『ローラ・レポート』に示された土地区画（地理学的空間の定位）と土地権者リスト（系譜的＝社会的空間の定位）の 2 つの視点は、「そこの眼」を反映しながら形成さ

れた「そとの眼」による表象である。この地理的空間と社会的空間の視点を組み合わせながらローラ島の現実を描こうとするメイソンの作業そのものにも、2 つの視点が醸し出すもうひとつの「複視」の次元が立ち現れてくる。この点も今後の重要な分析課題と認識して、短い本論を結びたい。

注

1 本論は科学研究費補助金（基盤研究Ｂ・海外学術調査）「オセアニア環礁景観の考古学的・歴史人類学的綜合研究とその現在的活用策の検討」（研究代表者：山口徹）によって実施した現地調査（2006 年８月、2007 年 3 月、2007 年 8 月）の成果に基づいている。

2 『ローラ・レポート』は章ごとに 1 ページから始まる別系統のページ番号が振られている。本論で特に参照する最終章のページ番号については便宜的に括弧を付して記すこととした。

3 メイソン（1913 年生-2005 年没）はミネソタ大学を経て、1946 年からマーシャル諸島で地域経済の特質に関する調査を開始し、1955 年にイェール大学でマードック（George Peter Murdock）の指導のもと人類学博士号を取得した。1947 年から 1969 年までハワイ大学教授を務め、同大の太平洋諸島研究プログラムの立ち上げに重責を果たすとともに、同大人類学部を率いた。第二次世界大戦後の世界のミクロネシア研究を率いた研究者の一人であったと評してよいであろう（Petersen[1997]）。

4 該当するアメリカ陸軍の地図は航空写真に基づく 2 万 5000 分の 1 の外郭図（Sheets 8443-Ⅳ-SW & 8443-Ⅲ-NW of U. S. Army Map Series W861）である。筆者はこの地図の原本を未確認・未入手である。

5 筆者は「そこの眼」を入念に精査するための十分なデータをまだ手にしていない。ジャベメメジを含めて、ローラ島の地図作成に携わった地元住民の過去と来歴を可能な限り再構成することは、今後の重要な調査課題である。

参考文献

Anderson, Benedict [1991] *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, Rev. ed., London: Verso.

Fry, Greg [1997] "Framing the Islands: Knowledge and Power in Changing Australian Images of 'The South Pacific'," *The Contemporary Pacific*, Vol.9, No.2, pp.305-344.

Gregory, Derek [1994] *Geographical Imaginations*, Cambridge, MA: Blackwell.

Haraway, Donna [1991] "Situated Knowledge: The Science Question in Feminism and the Privilege of Partial Perspective," in D. Haraway, *Simians, Cyborgs, and Women: The Reinvention of Nature*, London: Routledge, pp.183-201.

Jolly, Margaret [2007] "Imagining Oceania: Indigenous and Foreign Representations of a Sea of Islands," *The Contemporary Pacific*, Vol.19, No.2, pp.508-545.

Mason, Leonard, ed. [1967] *The Laura Report*, Honolulu: University of Hawaii Department of Anthropology, East-West Center Institute for Technical Interchange, and the Marshall Islands District of the Trust Territory of the Pacific Islands.

Petersen, Glenn [1997] "Leonard Mason," ASAO Home Page
（http://www.asao.org/pacific/honoraryf/mason.htm　2006 年 9 月 15 日アクセス）

Rynkiewich, Michael A. [1981] *Traders, Teachers, and Soldiers: An Anthropological Survey of Colonial Era sites on Majuro Atoll, Marshall Islands*, Saipan, CM: Micronesian Archaeological Survey.

Thomas, Nicholas and Diane Losche [1999] *Double Vision: Art Histories and Colonial Histories in the Pacific*, Cambridge: Cambridge University Press.

Thongchai Winichakul [1988] "Siam Mapped: A History of the Geo-Body of Siam," Ph.D. Dissertation, University of Sydney.

――――― [1994] *Siam Mapped: A History of the Geo-Body of a Nation*, Honolulu: University of Hawai'i Press.

＜未刊行地図資料＞

Land and Survey of the Republic of the Marshall Islands [n.d.] "Laura Land Tract Map," pdf digital file (in possession of the author).

Pacific Management Services Corporation [1991] "Laura Freshwater Distribution," August 27, 1991, leaf (in possession of the author).

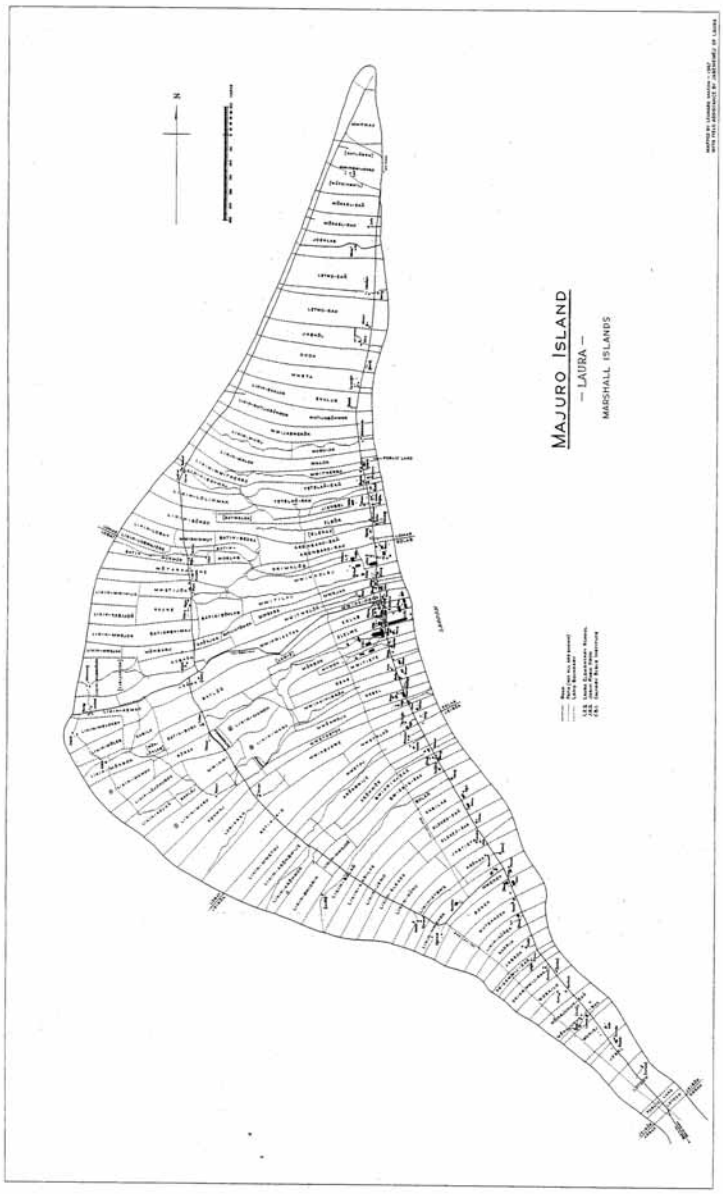

図1　メイソンとジャベメメジ作成のローラ島地図

（出所）Mason, ed.[1967: Appendix]

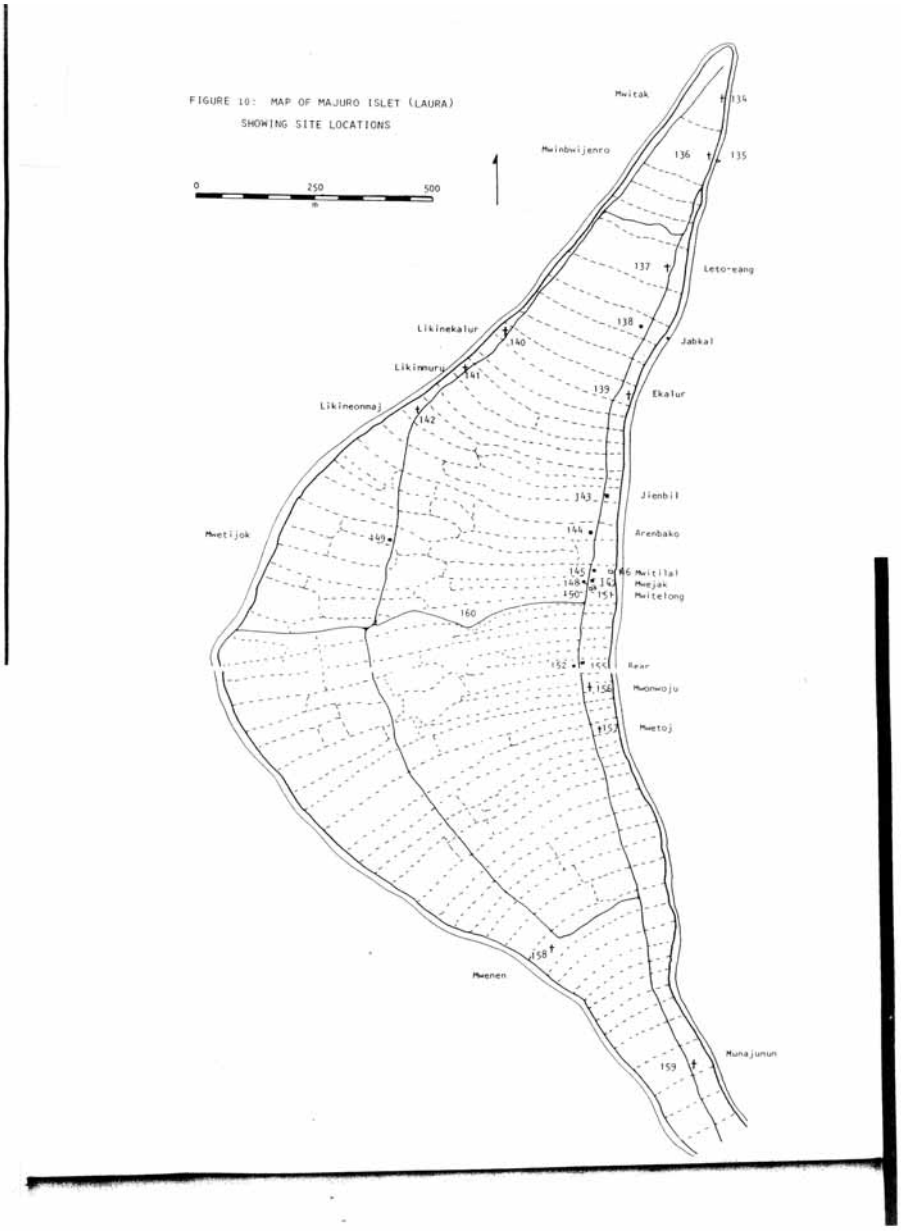

図2 ラインキイウィック作成のローラ島の植民地期遺構分布図

(出所) Rynkiewich [1981: Figure 10]

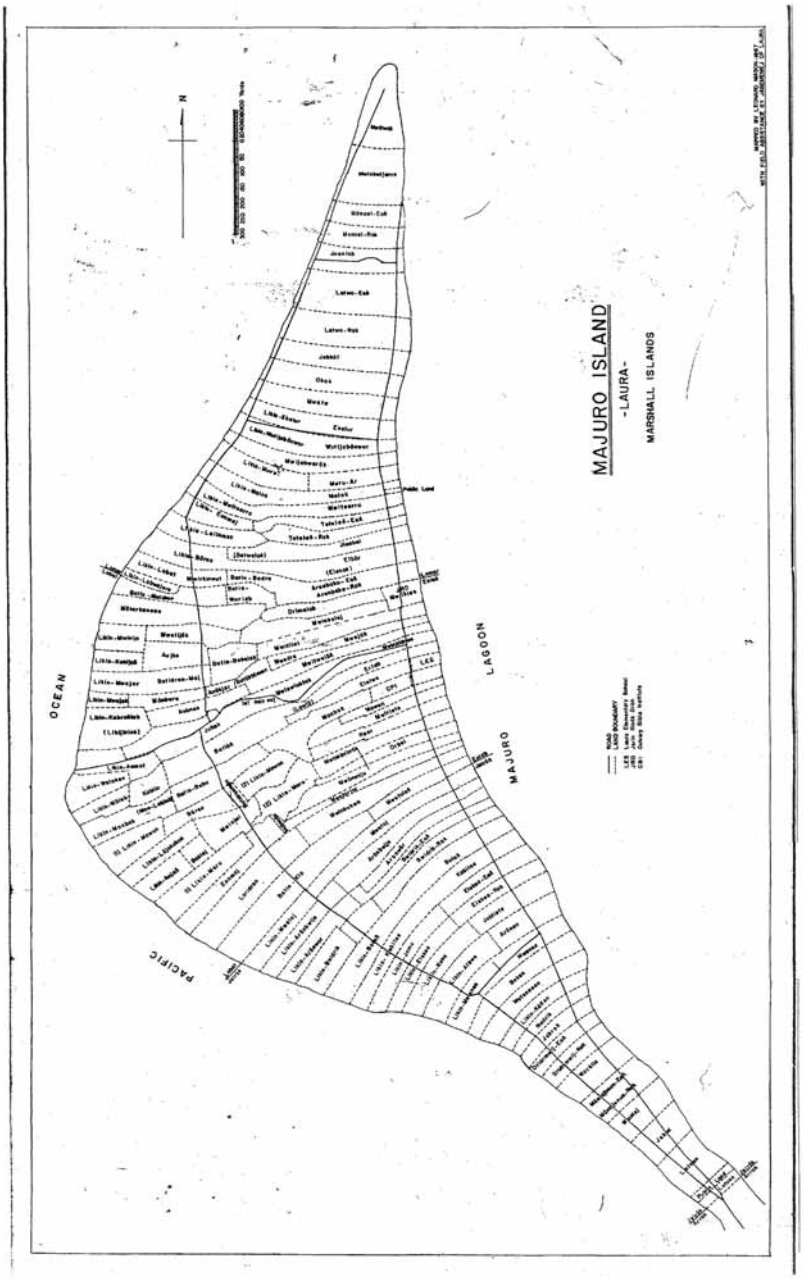

図3　マーシャル諸島土地測量局が使用するローラ島の土地区画図

(出所) Land and Survey of the Republic of the Marshall Islands [n.d.]

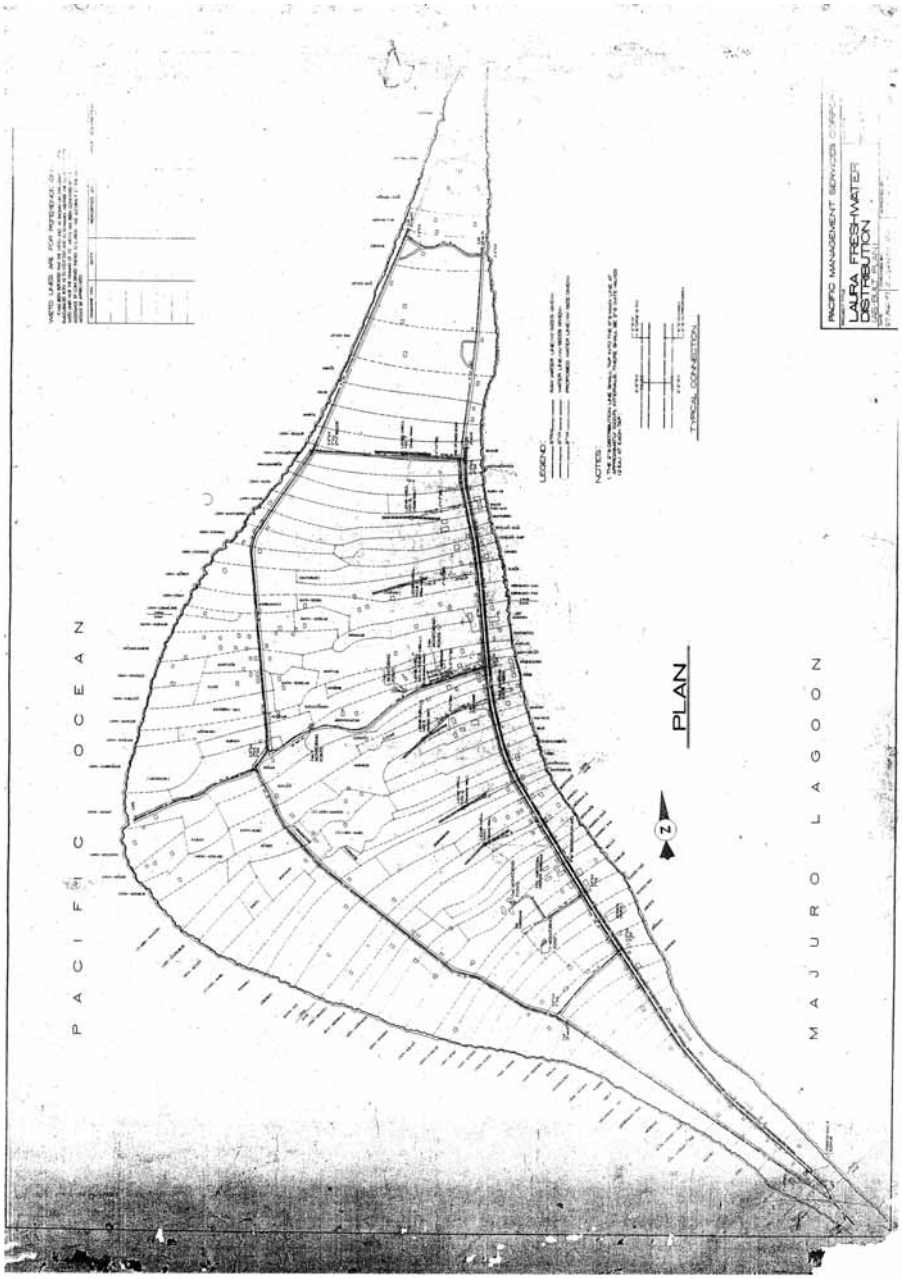

図4 ローラ島の淡水分布図(パシフィック・マネージメント・サービス社)

(出所) Pacific Management Services Corporation [1991]

調査研究報告書
新領域研究センター　2007－Ⅳ－36
「太平洋島嶼諸国における知と権力」研究会

2008 年 3 月 31 日発行
発行所　独立行政法人　日本貿易振興機構
アジア経済研究所
〒261-8545　千葉県千葉市美浜区若葉 3-2-2
電話　043-299-9500

無断複写・複製・転載などを禁じます。